

大人の教会学校 2020年1月

教皇フランシスコ（1）

その時代の全教会や世界を教え導こうとして要約したように見えるメッセージで、短くて特徴ある表現を作り出す傾向は、どの教皇にもあります。

ヨハネ・パウロ二世の場合は「恐れるな！」で、第二バチカン公会議後に長年省察や教会内論議を重ねて教義を公表することに対する揺るぎない自信を、カトリック信仰が取り戻すよう促すものでした。ベネディクト十六世は「理性と信仰」で、人間の理性と神への信仰とはともに関係しあい生かしあうという主張をしています。

教皇フランシスコにぴったりのキャッチフレーズになりそうなのは、「神はけっして倦むことなくわたしたちをゆるしてください」です。つまり、教皇職の初期段階で提示された特有の信念は、何にもまして神はあわれみといつくしみの神であり、ゆるしの力も罪びとを再出発させる力も無限である、ということを想起させます。

教皇はその信念を聖アンナ教会におけるミサの初説教の中心に据えまし、最初の「お告げの祈り」でも再びその主題に戻りました。

「へりくだって申しますが、わたしにとって今日の福音でいちばん心に残る主のメッセージはあわれみです」とそのミサで述べています。

福音の箇所、イエスと罪びととの出会いを語るころでは、「イエスはお忘れになります。忘れる特別な力をお持ちです。忘れ、口づけし、抱擁し、ただこうおっしゃいます。『わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。これからはもう罪を犯してはならない』（ヨハネによる福音書八章十一節）。」「主は絶対に倦むことなくわたしたちをゆるしてください。けれども、わたしたちはときどきゆるしを願うことに疲れるのです」と語っています。

もちろん、安っぽい「お恵み」や、罪に無関心な神さまの話ではありません。「もう罪を犯してはならない」という福音の引用箇所は、ゆるしのところとまったく同様に重要です。それでもなお、神のあわれみに強調点を置く傾向があると思われま。

これもまた、教皇に選出された翌朝に思いついたことではありません。それどころか、生涯を賭けて練りあげた司牧者としての見解と一致しています。

その見解とは、キリスト教の代表者たちには神のあわれみといつくしみにあふれる必要があるというもので、それを絶えず力説してきました。

フランシスコは、司教時代からモットーにしていたラテン語の *Miserando atque eligendo*（「あわれみ、そして選んだ」）を教皇紋章にも選びました。この句は、マタイがイエスに弟子として召される聖書の箇所についての聖ベダ司祭教会博士の説教に由来し、フランシスコにとって特別な意味があります。17歳のとき聖マタイの祝日にゆるしの秘跡を受けたからです。その体験により、神の無限のゆるしに対する認識をまったく新たにされ、司祭になる呼びかけを感じたと言っています。つまり、神のあわれみの強調は、自身の宗教的旅路に深く根ざしています。

（「教皇フランシスコがあなたに知って欲しい10のこと」ジョン・L.アレン・ジュニア）